

九頭竜湖におけるコクチバス調査について

福井県内水面総合センター

山田 洋雄

1. はじめに

わが国で外来魚が広く認知されたのは 1970 年代で、もともと食用として輸入された北米原産のオオクチバスやブルーギルが、各地の池や湖にゲームフィッシュとして放たれ、生息域が拡大したと言われています。その後、低水温を好み流れが速い河川でも生息できる外来魚コクチバスが湖や河川で確認されるようになり、漁協が放流するアユなどへの食害が懸念されることから、近年大きな問題となっています。

コクチバスは、本県においても 2007 年に大野市のダム湖（九頭竜湖）で生息が初めて確認されたため、国交省が調査に乗り出しました。その後を受けて、2012 年から内水面総合センターが九頭竜湖で生息状況を調査しています。

2. 調査の概要

九頭竜湖は、九頭竜川の最上流に位置する面積 8.9km^2 、長さ 13km、最大水深 100m を誇るロックフィル式のダム湖です。つまり、県を代表する自然豊かな九頭竜川の上流にコクチバスが繁殖している湖があるのです。

センターでは、この広大なダム湖において、春の産卵期には目視や潜水による産卵床の分布状況（バスの仲間は産卵床でオスが子供を保護します）、夏から秋の活動期には、目視や大型刺網による成魚の生息状況調査を行っています。捕獲されたコクチバスについては、大きさや重さを測ったあと生殖腺の発達具合や胃の内容物を調べます。

また、毎年 5～6 月に、漁協・漁連・県・国などによる一斉駆除イベントを行っており、産卵場所に集まるコクチバスを一網打尽にするための駆除活動を行っています。

3. 新しい駆除の試み

2018～2020 年の 3 年間、ダム管理会社の協力のもと、コクチバス産卵期である 6 月に 10 日間程度かけて、試験的に湖の水位を 3m 以上低下させ、産卵床を干出させる駆除を実施しました。卵や仔魚を干出によって死滅させることができるため、多数の産卵床や仔魚を一度に壊滅することができる一方で、水位低下による発電量および下流用水補給量の減少など、ダム管理者側のリスクが高く莫大なコストがかかるため、費用対効果を明らかにする必要があります。

4. 今後の課題

対象水域が広大であること、すでにコクチバスが定着して再生産を行っていることなどの理由から、根絶は難しいと考えられます。しかしながら、地道な駆除活動を通じて、この湖は放流しても無駄だという姿勢を示すとともに、下流域への分布拡大を防ぐためにも、今後は更なる駆除の効率化が求められています。

